

平成 25 年度

読書感想文コンクールを終えて

情報メディア教育センター運営委員会

第 38 回校内読書感想文コンクールの審査結果を発表します。1 年生から 3 年生まで、あわせて 370 編の応募がありました。情報メディア教育センター運営委員会の教員 7 名と国語科教員 3 名で審査と投票を行った結果、8 名の入選作を決定しました。ここに改めて入選者の名前と受賞タイトルを挙げ、榮譽を称えます。

最優秀賞

該当なし

優秀賞

| | | |
|-------------|--------|-------------------------------|
| 電気工学科 1 年 | 堀口 颯馬 | 「戦争の実態—「永遠の 0」を読んで」 |
| 電子制御工学科 1 年 | 粟生 小百合 | 「永遠の 0 を読んで」 |
| 情報工学科 1 年 | 林 大泰 | 「部活での経験とは—「歌え！多摩川高校合唱部」を読んで—」 |
| 物質化学工学科 1 年 | 大西 朝登 | 「すべてを捧げる仕事—「鉄道員」を読んで—」 |
| 情報工学科 2 年 | 宮本 靖貴 | 「障害者福祉のあり方」 |
| 機械工学科 2 年 | 松林 悠汰 | 「サムライ魂」 |
| 物質化学工学科 2 年 | 小谷 ひかる | 「生きるための力」 |
| 物質化学工学科 3 年 | 隅谷 大良 | 「権威に対してどう向き合うか—「城」を読んで—」 |

また、惜しくも入選には至りませんでした。審査の過程で優れた評価を得た作品を佳作としました。作者名を紹介し、努力を称えます。

佳作

| | | | |
|-----------|----------|----------|-----------|
| 1M 小川 椋太郎 | 1M 田村 直人 | 1M 中島 吉規 | 1M 吉村 寛人 |
| 1E 紀伊 凜香 | 1E 弘瀬 雅也 | 1S 黒田 晃市 | 1I 黒田 晃平 |
| 1C 甲斐 萌 | 1C 西澤 峻平 | 2M 松内 秀直 | 2E 伊庭 由季乃 |
| 2E 出口 達也 | 2S 佐藤 優志 | 2I 真弓 凌輔 | 2C 坂本 大河 |
| 3M 石田 豊 | | | |

さて、入選作品についてそれぞれ簡単に講評しておきます。入選作品とあわせて読み、自分が読書感想文を書く際の参考にしてください。

本年度は、百田尚樹『永遠の 0（ゼロ）』についての感想文が多く寄せられました。同書の映画化が話題になったり、いわゆる「零戦」の開発技師をモデルにしたアニメ映画が公開されたりしたことで、興味を持った人が多かったのでしょうか。優秀賞にも 2 作品が選ばれています。

まず 1E 堀口さんは、主人公・宮部久蔵が家族と再会するために戦場で生きること执着していた一方で、特攻隊に志願した理由を軸に、宮部久蔵の苦悩や願い、戦争の悲惨さについて自分の考えをまとめました。惜しむらくは裏表紙の紹介文を引用しすぎていることです。読書「感想」文ですから、読んで考えたことに十分な分量が割けるよう工夫してください。

1S 粟生さんは、同じく『永遠の 0』について第二次世界大戦における日本海軍の無謀さをまとめた上で、科学技術とそれを利用する人間の在り方について普遍的な問題を指摘しています。読書の醍醐味は虚構世界

を通して現実世界が抱える問題を発見することにあります。皆さんもこの発見を大切にして、自分の言葉で感想をまとめてください。

1I 林さんは実話を元に書かれた本を取り上げました。高校生が「強い思い」を持って部活動に取り組むさまは、共感しながら読むことができたのではないのでしょうか。林さんが文中で触れた星野富弘氏の作品集は本校図書館にも所蔵されています。星野氏が障害を得て画家・詩人になるまでを振り返った『愛、深き淵より』とともに、ぜひ手に取ってみてください。

1C 大西さんは家族に先立たれ、鉄道員の仕事も終えようとしている乙松の姿を描いた『鉄道員（ぽっぽや）』を取り上げ、働くということ、「他人を想いやり、想いやられながら生き」ることについて考えをまとめました。10年後、皆さんの多くは社会人として活躍しているでしょう。自分はどんな風に生きていきたいか、社会に出る前にぜひ考えてもらいたい問題です。

2M 松林さんは幕末に活躍したジョン万次郎のアメリカ時代を描いた小説に取り組みました。今から200年近く前の人々にとって、今以上に世界は広く、異文化は受け入れにくかったはずですが。ジョン万次郎はいかに世界を受け入れ、また異国で受け入れられていったのか。登場人物であるホイットフィールド夫人の言葉を最初に紹介することで、読み手の興味をひく感想文になっています。

2I 宮本さんは障害者の暗部を描いたルポタージュに取り組みました。障害者は社会的弱者だと言われますが、どう弱者なのか、その実態は見えにくいものです。タブー視され、積極的に報道されたりしないからです。しかし、社会の一員として「目を向けなければいけない」ことだと宮本さんは言います。これから社会を作っていく人の言葉として、とても頼もしく思いました。

2C 小谷さんは梨木香歩の小説を手掛かりにして、人間の死と、そこに至るまでにいかに生きていくかということを考えました。同じようなことを考えたことがある人も多いでしょう。「死とは何か。そもそも私たちはなぜ生きているのか。」前半にある読者への問いかけが効いています。

3C 隅谷さんは19世紀から20世紀を生きた作家、フランツ・カフカの作品に取り組みました。権威に対して反抗したり不服従の態度をとるのではなく、どうすればうまく付き合うことができるかという、社会的な問題を軸にまとめています。未完の小説であることに注目し、主人公はどうすれば権威の象徴である城にたどり着けるかというまとめ方が巧みです。小説の内と外、また現実世界に置き換えてみるなど、感想文を書く際に色々な着眼点があることを示してくれています。

最後に、「人は何のために読書をするか」ということを皆さんに問いかけたいと思います。

読書とは自分を外の世界とつなげる行為です。外の世界とは自分や自分が生きている世界以外の世界、他人であり現実であり理想や空想、つまり「他者」の総体ともいえます。

そういう風に考えると、「自分は理系だから…」「高専生だから…」というのは読書をしない理由にならないのでは？むしろ実際的で専門的な技術を身につける高専生だからこそ、他者としっかりつながっていけるようになってほしい、学生時代に読書を通して、こころを鍛えてほしいと思います。来年度も引き続き積極的な参加を期待しています。

(国語科：刀田)

